第1節　資料館における展示・情報公開活動

1．山口県立山口博物館との連携協力協定・企画展・社会教育事業

大学による地域連携・社会貢献が強く求められている昨今であるが、当館の本学における主幹業務（埋蔵文化財保護業務）や館の規模、人員配置では博物館活動を十分に行うことは困難であることが近年の問題となっていた。その状況を改善すべく、当県の基幹博物館である山口県立山口博物館と連携協力協定を締結する運びとなり、6月24日には両館長による調印式が行われた（写真1）。

記念すべき連携活動の第1歩として開催したのが、両館が所蔵する考古資料を用いた連携企画展『半世紀の遺跡調査から読み解く 先史・古代の平川』である。

本学吉田構内が所在する山口市平川地区は、昭和40年代以降、本学のほか高等学校や中学校など教育施設が設立され、文京地区としての景観を備えることとなった。それと同時に、宅地開発も急激に進行したことから、農村地区としての旧来の景観が大きく変化することとなった。平川地区は長らく農村であったことから、地下の遺跡が良好に遺存していることが大きな特徴となっており、山口市でも埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布する地域であることから、当地区の考古学的な考察・評価が地域史を復元する上で重要な役割を果たすことになる。

展示では、本学吉田構内が所在し、当館が継続的に調査を実施している吉田遺跡の資料を中心に、吉田遺跡集落の奥津城と見られる日吉神社横穴墓群出土品（山口県立山口博物館所蔵）のほか、山口市教育委員会と山口市歴史民俗資料館の協力のもと、平川地区の主要遺跡から出土した考古資料を多数公開することにより、当地区の特色や先進性を考察し、文字によって語られることのない平川の歴史を復元した（写真2・3）。

平成27年7月27日から10月17日の会期中、740名の方々に観覧いただいたが、アンケート調査では「小路遺跡に関する講演をしてほしい」という具体的な要望や「古代から中世を中心とした展示をしてほしい」「明治期における山口の文化・産業の展示をしてほしい」など展示に関する要望も寄せられた。

連携企画展に関連し、山口県立山口博物館の教育普及講座『山口市平川地区の遺跡探訪』を両館主催により10月10日に実施した。

コースは①山口大学内大賀ハス池公園（山口市仁保源久寺より株分けされた古代ハス）－②日吉神社横穴墓群（古墳時代終末期）－③山口大学就職支援施設「O-HARA」敷地（吉田遺跡室町時代集落）－④山口大学遺跡保存地区（吉田遺跡各時代遺構密集地区）－⑤埋蔵文化財資料館にて連携企画展の見学・資料解説－⑥山口大学遺跡保存公園（吉田遺跡弥生時代～古墳時代集落）－⑦神郷大塚遺跡（弥生時代から古墳時代終末期にかけての集落）－⑧小路遺跡（古墳時代中期の集落）－⑨広沢寺古墳（古墳時代後期）の全長約3.5㎞と定め、現地で解散することとした。

当日の参加者は、小学生から70代までの8名と少数であったが、天候にも恵まれ、道中参加者から様々な意見や感想が飛び交うなど活気にあふれた講座となった（写真4～6）。コースに古墳など視覚的に理解できる遺跡が少なく、いにしえの景観を参加者がどこまで具体的に想像できるか危惧されたが、途中に出土資料を熟覧したことで、遺跡への理解がより深まったように感じられた。

参加者からは、「ちょうど良い距離の探訪だと思った。また地区を変えて、このような遺跡探訪を希望する」「平川地区の様子を知ることが出来て、また知りたいと思った」などの声が寄せられる一方、「1回につき1～2遺跡ずつを何回かに分けて定期的にあると良い」などの要望も寄せられた。

遺跡探訪は、現在（令和元年度）でも継続しており、両館連携の看板事業となっている。

写真１　山口県立山口博物館との連携協定調印式

写真２　連携企画展の模様

写真３「平川ふるさと講座」展示見学

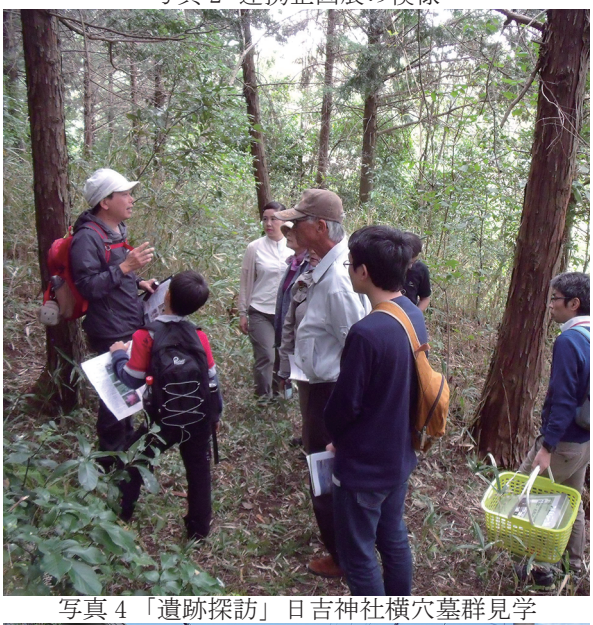
写真４「遺跡探訪」日吉神社横穴墓群見学

写真５「遺跡探訪」遺跡保存公園見学

写真６「遺跡探訪」広沢寺古墳群への道中

2. 山口県大学ML連携特別展『「時」を学ぶ～時は流れる・モノは変わる～』

当事業は、平成25年度に山口県内大学博物館・図書館連携へと転換を図ったが、その3年目となる平成27年度事業は、平成26年度から新たに1大学2館（山口学芸大学・山口芸術短期大学図書館、山口大学工学部図書館）の参加があり、12大学17館での開催となった。

当年度も、10月から1月までの間に各館が最低2ヶ月の期間を設定し、「つなぐ」を共通テーマに展示を開催することとなった。ML連携特別展の開催に際しては、共通テーマのもと、本学参加館（当館、総合図書館、医学部図書館、工学部図書館）でさらに共通テーマを定め、展示を構築している。図書館からの提案により、当年度の共通テーマは『「時」を学ぶ』となり、当館はそれに「時は流れる・モノは変わる」という副題をつけ、平成27年11月１日から平成28年1月29日までの会期で開催した。

展示では、考古学的に追うことができるモノの変化を通史的に学ぶことを目的に、展示資料を調理具（深鉢や甕、鍋など）と食器（坏や高坏など）の土器類に限定し、形態と使用方法の変化を追い、変化の原因や契機を解説した。会期中の11月７日にはミュージアムトーク（展示解説）を開催した（写真7）。

入館者は290名と伸び悩んだものの、観覧者からは「土器の形の変化の理由や利用方法が解説されて面白かった」「解説文がわかりやすくて面白かった。展示とあわせてより楽しめた」といった声が寄せられた。

そのほか、展示内容と直接の接点はないが、当該年度に吉田遺跡から「音義木簡」が出土したことを記念し、展示関連事業として会期初日の11月１日（吉田キャンパス大学祭）に総合図書館1階りぶカフェにて「木簡ワークショップ」を開催した（写真8）。吉田遺跡からの出土品をもとに製陶業者に特注した須恵器円面硯の複製で墨をすり、木板に自由に文字を書くというシンプルなイベントであったが、総勢40名の方々に参加いただいた。

当該年度は、筆者が山口県大学ML連携事業事務局企画担当として、事務局代表の吉光紀行氏（当時：本学情報環境部学術情報課長、現：梅光学院大学特任准教授）と参加全館の展示を視察した最後の年となった。氏には、参加館各位と直接顔を合わせることにより情報交流を円滑に行う術を教授されたが、当該年度末の氏の退職により、次年度以降、筆者を含め事務局にそのような動きがなくなった。当事業は現在も継続しているが、参加館より事業の形骸化等が指摘されつつあることを重く受け止めたい。

写真７ ミュージアムトークの模様

写真８ 「木簡ワークショップ」の模様

3．第4回山口大学所蔵学術資産継承事業成果展「宝山の一角」を共催にて開催

平成24年度より、山口大学学術資産継承事業委員会が主催する事業成果展『宝山の一角』の共催館として、展示空間の提供と展示設営協力、会期中の管理運営を行っている。

第4回となる平成27年度も、例年通り前期・後期の2部構成となり、前期展は山口商工会議所主催の「山口お宝展」への参加も兼ね平成28年2月27日から4月22日まで、後期展は5月9日から7月1日までの会期で開催した。

前期展では、当館所蔵潮待貝塚（下関市）出土資料とともに、明治維新期の鉱山開発関連資料（理学部所蔵）、明治期の九谷焼と河井寛次郎作品（経済学部所蔵）、明治維新関連文書「小倉地形（上郷・林家文書）」など（図書館所蔵）を、後期展では山口県内出土鉄刀（人文学部所蔵）、日本の金鉱石（工学部所蔵）、山口県民具資料「背負梯子」など（農学部所蔵）、山口県哺乳類交連骨格標本「アナグマ・タヌキ」など（共同獣医学部所蔵）、典籍『名家雑劇』（図書館所蔵）を公開した。

前期展では551名、後期展では509名、総数1,060名もの方々に観覧いただき、地域の方々の関心の高さがうかがわれたが、専門科目や共通教育科目などの授業課題としても複数回活用された。そのほか、学生スタッフによって市民向けに土曜日に開催される吉田キャンパスガイド「キャンパスてくてくツアー」での団体見学なども受け入れた。

前後期ともに会期中にミュージアムトーク（展示解説）を開催し、多くの参加者を迎えることができた。前回までは解説を文書・典籍専門部会長と博物専門部会長、または展示資料を専門とする教員が担ってきたが、今回の後期展から、文書・典籍に関しては所蔵する図書館職員が行うこととなった。

観覧者からは、「各学部で多くの貴重な資料をお持ちですね。是非展示していただきたいです」「考古資料の展示が見られると思って来ましたが、明治期の企画展で山口を震源とする維新に関連する企画展で勉強になりました」などの声が寄せられた。

展示会期中、広島大学総合博物館を会場に開催された第11回日本博物科学会にて、筆者は「大学博物館設立に向けて－山口大学学術資産継承事業委員会の活動－」と題する事例報告を行った。会場からは、学術資料の保存・継承・公開を基幹とする委員会の活動に対し、「「箱」さえあればすぐに大学博物館として機能しうる」との高評をいただいたことを付記しておく。

写真 9　前期展ミュージアムトークの模様

写真 10　後期展ミュージアムトークの模様

4．平成27年度刊行物

1.『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』

平成27年度は、平成24年度に実施した構内遺跡発掘調査概報と資料館活動報告を所収した年報を刊行した。発掘調査関係としては、本発掘調査2件（吉田・光）、予備発掘調査3件（吉田）、工事立会11件（吉田5・白石5・光1）の成果が掲載されている。

館の活動報告としては、展示・公開活動として4件の企画展示等事業と、1件の社会教育活動、当該年度刊行物3冊を報告している。そのほか、川島尚宗による「光市東之庄神田遺跡出土の縄文時代石棒」と題する付篇を所収している。

2.『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸＸＩ』

上述の年報は平成15年度以降の新たなシリーズであり、当年報は当館設立以来平成14年度までのシリーズとなる。これまで平成7・10～14年度が未刊行であったが、平成13年に実施した構内遺跡調査報告を所収した年報を刊行した。試掘調査3件（吉田1・小串1・常盤1）、立会調査9件（吉田）の成果が掲載されている。そのほか、田畑直彦による「吉田遺跡第Ｉ地区Ａ区の未報告図面について」と題する付篇を所収している。

3. 館蔵資料調査研究報告書5『見島ジーコンボ古墳群第124号墳　潮待貝塚出土資料調査報告』

平成22年度から開始した事業で、継続的に見島ジーコンボ古墳群の出土資料調査及び報告書の刊行を実施してきたが、川島尚宗の着任により、当館所蔵潮待貝塚（下関市）出土資料にも着手した。

平成27年11月９日から24日にかけて、第124号墳を対象に当館と萩博物館の収蔵資料の悉皆調査を実施し、その成果を収録した。また、下関市立考古博物館所蔵の潮待貝塚出土資料を参照させていただきつつ、当館所蔵資料の調査成果を収録した。

4. 山口大学埋蔵文化財資料館通信　第26号『てらこや埋文』

平成18年(2005)より刊行を開始した広報誌であり、当初季刊で刊行していたが、平成23年度以降は年度末に1度の刊行となっている。巻頭頁は当該年度初旬に出土した音義木管の速報を、2頁から3頁には展示活動、4頁には公開授業の模様、5頁には「資料館この一品」として潮待貝塚（下関市）の貝輪を、6頁から7頁にかけては4年の任期で退任する山内直樹館長のインタビュー記事を掲載した。

当館は現状で実施年度の4年後に年報を発行していることから、当冊子は速報性のある刊行物として重要な役割を果たしている。今後も年度末の刊行を継続したい。

5. 山口県大学ML（Museum・Library)連携事業報告　平成27年度展示テーマ『つなぐ』

平成22年度より実施している山口県大学ML連携の事業報告書は、事務局企画担当である筆者が編集し、当館が発行している。平成27年度は、前記したとおり12大学17館が参加し、一定期間テーマを共通とした学術資料展示を各館にて開催した。本書については一般の方は入手困難と思われるが、山口県大学ML連携事業公式web（http://www.oai.yamaguchi-u.ac.jp/ml/）にてデジタル公開を行っている。

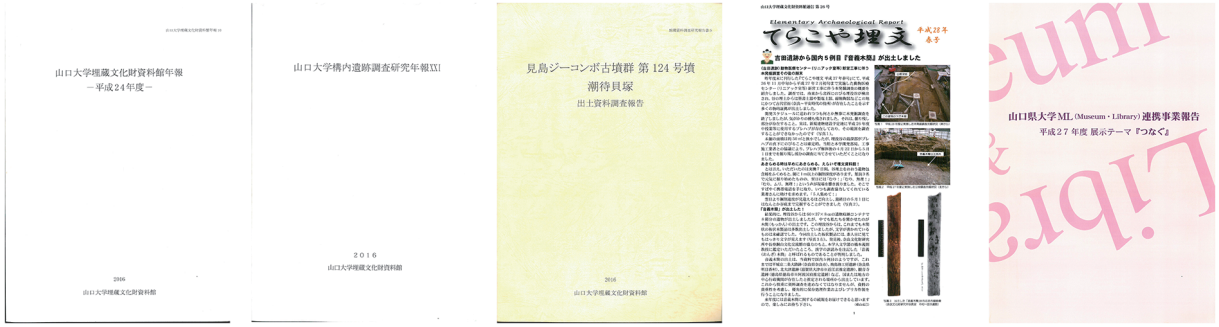

写真 11　平成 27 年度埋蔵文化財資料館刊行物